秋季闘争はどうなるか

政府 経営者 の出方変らず

闘う以外にない打開の道

秋闘特集

総評の秋季年末闘争は〝低調に終るのではないか〟という当初の予想をのり越えて春闘以来最大のヤマを迎えた。これより先、政府は国鉄、郵政両当局による組合員天引き中止、闘争に対する処分警告等々にはじまった先制攻撃を行い、公労法に対する一方的な解釈を発表して、官公労の圧殺をねらつた。一方、民間労組に対しても、日本労働運動史上初めてといわれる炭労の杵島闘争連帯ストに〝同情ストは違法である〟との見解を発表。また秋季闘争の柱といわれる鉄鋼、造船、日通の賃上げ闘争も猛烈な不況宣伝でガンとしてゼロ回答をつづけている。では秋季闘争はこれからどうなるのか？各戦線の動向はつぎの通りである。

統一闘争への期待高まる

【鉄鋼、造船、日通】鉄鋼労連（二十五組合九万六千名）は三千円、全造船（二十六組合五万五千名）は千五百円―三千円、全日通（八万名）は二千円の賃上げを要求しているが、いずれもゼロ回答。鉄鋼は八日第一波二十四時間一斉スト、十一、十二日に第二波四十八時間ストを決行したが、さらに第三波は十七、十八両日、四十八時間ストを決行する。各社とも不況宣伝をくり返し、日本鋼管は川崎市に建設中の新鋭水の江工場の工事中止を近く発表する予定である。また全造船は十二日から第一波四十三時間ストに突入したが、名古屋造船労組（千五百名）は会社側が進水式をくり上げたノルウエー船の進水を阻止するため、九日正午から二十時間ストを決行した。この決起大会には国鉄名古屋地本の労働者約七十名が激励に駆けつけ、満場の拍手をうけたが、各労組ともゼロ回答の壁が厚いので、統一闘争に対する期待が大きい。全日通▽第一波＝十月十七日、正午より二時間全国一せい職場大会▽第二波＝十月十八日、十五時から退社まで時限スト、ひきつづき定時退社▽第三波＝十月十九日六時より四十八時間ストで闘う。

国鉄当局の強硬態度つづく

【国鉄】最大の期待が持たれている。春闘以後、国鉄当局は政府の指示で組合が解雇された幹部を排除しない限り、団体交渉を行わないという強硬な態度をつづけ、さらに組合員の天引き中止など、過打ちをかけてきた。このため昨年は百％昇給を勝ち取った七日実施の定期昇給問題は、交渉によって処理することはもちろん、ダイヤ改正による人員増加要求など経済的要求さえ、なに一つ解決されない状態になつてしまつた。そのため下部組合員の不満は増大するばかりで、中闘もついに闘争強化にふみ切り、九月二十六日から一週間、順法闘争に入つた。要求も「百％昇給実施」「ダイヤ改正に伴う要員確保」「団体交渉再開」の三本にしぼり、公共企業体等労働委員会会長の藤林敬三氏のあつせんで話し合いに入つたが、そのなり行きによつては春闘以上の実力行使を予定している。

勤務評定反対で統一行動

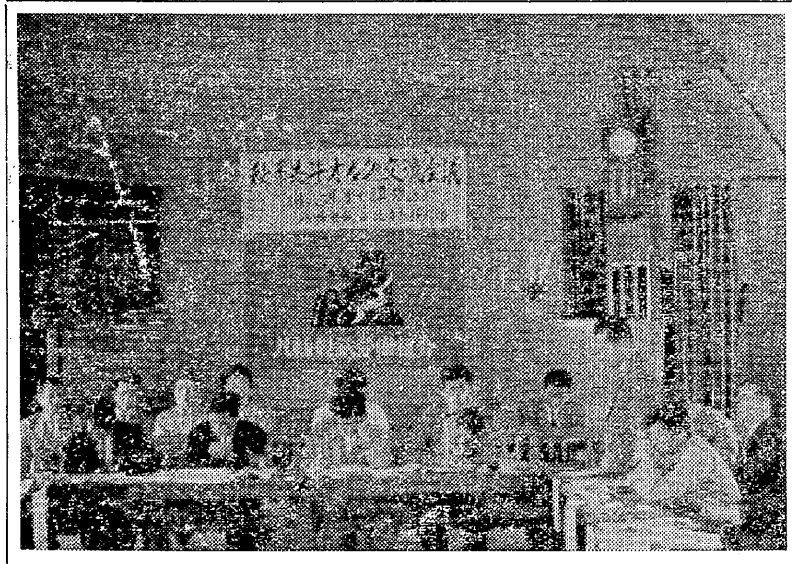
【日教組】同じような攻撃は日教組にも出ている。愛媛県ではすでに実施され、近く文部省から各府県に通達が出されている勤務評定で、日教組は組織をあげてその反対闘争を闘つている。これはいわば〝先生の通信簿〟で、これが国鉄と同じように昇給問題に影響しひいては杵島の経営者が狙つているような職制強化に通じるのである。組合は当面の統一行動として十八日に全国一斉に「教育を守る大会」をひらき、十一月下旬から十二月上旬にかけてひらかれる各府県議会をヤマに闘争を強化するこうみてくると政府局経営者の攻撃は、終始一貫しており、組合側は闘う以外に局面打開の道はないわけである。組合側がどこまで統一して闘えるか――秋季闘争の勝敗はこの一点にかかつているといえよう。

相ついで起つ

【全逓、全電通など】なおこのほかに全逓労組は特定局制度廃止、年次休暇協定締結を要求して十七、十八両日時間内職場大会、全電通は公社側の一方的な合理化計画実施反対、処分反対などで十六―十八日の三日間規制通信闘争、全専売は仲裁々定完全実施、給与体系改悪阻止などを要求して十六日から四日間超勤拒否、休暇闘争を展開し、官公労も三千円・プラス・アルファーの賃金を要求して闘争をすすめることに決定した。

臨時従業員の賃上げを要求

【全日通】全日通は臨時従業員（約四万人）の賃上げ（月額二千円程度）や事務服、作業服貸与の制度化を要求していたが、会社側は十二日、▽臨時従業員の画一的賃上げは全国の実態にそわない。なおこの問題は貴組合とは関係ない▽事務服、作業服の問題は実態調査中、と回答した。組合側はこの二項目も賃上げなどの要求とともに闘いとる方針である。



十三単産共闘会議（於八幡製鉄）

（上）問題の杵島三役の間で会談を行つた所　（下）生活資金の貸出し

會社賃下げを固執

杵島社長出席で団交再開

十月三日交渉決裂後、杵島対策委員会及び炭労中闘は、今後の闘争推進についてあらゆる角度から検討し、企中闘発第二十二号を決定するとともに、退職手当闘争の強力な推進を決定した。

積極的な解決に動く

十月十三日午後二時二十分より佐賀で社長および宮島専務と野口、このような情勢及び会社側の内部事情を反映してか、会社の動きが活発になり、従来一度も組合との交渉、折衝に出席したことのない高取社長が会談を申込んでくるなど、積極的に動き始めた。

知事も再斡旋へ

十三日午後四時五十分ごろ、杵島労組の宿舎でオルグ団および中闘の会議に佐賀県川崎経済部長が来て、三役と話し合いたいということであつたから、その内容は明十四日県知事と会つてくれということで組合からは「会社は解決するの腹がまえが出来ているのか、そうでなければいくら会つてもムダだ」ということを話したら、経済部長は「会社と会つて来たが大体解決したい意向のようである」ということであつたから、十四日午後十一時より県知事と会見することにした。

交渉を再開

知事と会見後、社長、宮島専務と組合三役が引続き会談を行つた結果、十五日午後二時より杵島本社（佐賀）で交渉を再開することになつた。

会社側は社長、宮島専務、藤沢労働部長

組合側は野口副委員長、杵島三役

同日の団交では、(1)これからの話合いの基本的な態度として企業の安定と繁栄を中心にする。(2)三日決裂した団交は双方とも不本意であつたので今後話合いを続けて行く。(3)三日の団交の際組合から出された案を糸口に話を進める。以上三点で意見の一致を見た。

スジが通らぬ言分

十六日は前日と同じメンバーでもたれた。田中九州鉱業連盟理事長がオブザーバーとして立合つた。話合いは三日の団交決裂直前の状態から始めるという基本線を確認して、まず出炭計画を取上げた。十七日も出炭計画、原価計算などで論議を交した。

この交渉で組合は現在交渉で約束した期末手当の不確定分をどうするかということを交渉しようというつたら、会社は再び約束を破り、八五〇万円の賃上げ（註　十月三日の組合提案は三千トンが八五〇万円の賃下げ分に当るので増産して賃下げしないと主張）をどうするかを主張、第三回交渉は全く行詰り、いくら石炭が出ても賃下げは強行するという考えが変つていないことがますますはつきりした社長が出席した交渉で容易に解決する期待はかけられない状態である。

組合　昨日の論議からして五四・一〇〇トンで苦労し、トン当り十五円であるので期末手当修正分が当時不確定だからどうするか、というのが本日の交渉になる。

会社　そうではない。それは組合の質問に答えたのみで八五〇万円の賃下げをどうするかということだ。

組合　それは五四・一〇〇トンで期末手当の修正分をどうカバーするのかということで、双方意見の一致を見たではないか。

会社　どうカバーするかということは出炭でなく賃下げである。

組合　経理がトントンになる線をどこにおくかということで会社は儲からんでもよいといつたではないか。昨日の論議から全く変つている。会社の意見はスジが通らない。

会社　このへんで休憩して交渉を新たな観点から論議してみたい。午後七時再会の予定であつたが、会社より「検討したがいい案が出てこないので明日午後一時まで待つてほしい」と申入れがあり、十八日午後一時から開くことになつた。（電話情報）

ものである等説明の後、今後は積極的に解決したいと考えるという挨拶があつた。

これに対し組合の方からは、この前の交渉においても会社は全然誠意をみせていない。今度は誠意をもつて交渉されたいという意味のことを述べた。

これについては社長より、今後交渉が行われる場合は、社長が責任者として出席すると約した。

人間の良心に従え

ネール首相演説の要旨

ネール・インド首相歓迎国民大会が去る八日午後より都体育館で、約一万人の大拍手の中で開催された。岸首相、鈴木社会党委員長等の出席で大会は盛会をきわめ、インド国歌の合唱は会場にどよめき渡つた。

この時のネール首相演説の要旨を阿具根参議より通信として寄せられた。

× ×

私は数十年来日本に訪れることを願つていた。それは美しい日本を見ることと、勤勉な日本国民と親しく話をすることもあるが、それよりも私は限られた時間内に出来るだけ多くを学びたい為だつた。それ以上に又インド国民からの善意と友情のメッセージをお伝えしたかつたからだ。

私は自分で話をすることでなく身体を動かして見て廻る事だつたが、日本国民の熱心なる歓迎をうけ、日本国民の利口な歓待を受けいつも話をさせられる。私は印度さえ全部を知らない。その私が日本へ来て講義をするような事は考えられないが、言葉を飾らずに申上げたい。

日本と印度は遠い昔から仏教を通じて結ばれていた。それが途中から西欧のアジア進出によつて遮断された文化的に後進国であるアジアで日本のみは西欧に負けぬ輝かしい発展をした。それは全アジア人のあこがれであり、信頼とアジアの星であつた。併しそのあこがれと信頼はだんだんと冷くなつて行つた

それは、日本の優越が次第に権力となり誇りとなつて行つた事だが、日本国民の熱心なる歓迎をうけ、日本国民の利口な歓待を受けいつも話をさせられる。私は印度さえ全部を知らない。その私が日本へ来て講義をするような事は考えられないが、言葉を飾らずに申上げたい。

日本と印度は遠い昔から仏教を通じて結ばれていた。それが途中から西欧のアジア進出によつて遮断された文化的に後進国であるアジアで日本のみは西欧に負けぬ輝かしい発展をした。それは全アジア人のあこがれであり、信頼とアジアの星であつた。併しそのあこがれと信頼はだんだんと冷くなつて行つた

それは、日本の優越が次第に権力となり誇りとなつて行つた事だ

権力と誇りは、遂に日本を破壊に導いて行つた。小数の人が自分の考えを押しつけるために権力を用いるようになり遂には暴力となつて行つた。私は軍の大小を問わず、暴力を徹底的に排する併し日本国民は世界の国民が知らぬ試練を受けた。原爆がその通り敗戦も又その通り高価な代償であつた。しかし得難いレッスンを受けた国民である。この貴重なるレッスンは決して無駄にされてはいけない

私は社会主義者であるがしかし印度を社会主義の線にそつて復興すべきであると思つているだけで社会主義のイズムとイズムの狭い国家主義は世界にとつてマイナスである。私は一つのイズムに左右されたくない。一つのイズムで進もうとすれば必ず暴力が伴う。私はそれを排する。

私は日本に来て驚くべき事を皆さんと共に知らされた。それは人間の作つた星、人口衛星が今、われわれの住む地球の廻りを生きものの如く飛んでいることだ。科学は不可能を知らない。およそ考えもされなかつた事が実現されているのに政治は余りにも時代遅れである。資本主義や社会主義、共産主義というイズムとイズムの争いはもう時代遅れではないだろうか。今や一つの世界が近づきつつある。まして私が一番イヤな事は〝冷い戦争〟と呼ばれているものである。このまま行けば益々危険な状態になる。冷い争いは憎しみを増すばかりであり、より大きな破壊への道でさえあると思う。極言すれば冷い争いをいつまでも続けて世界の人類が憎し熱い砲火でたたき合いつまでも続けて世界の人類が憎し熱い砲火でたたき合つた方がまだよい、そうすれば一度に目が覚めるであろう。

〝軍事基地反対〟〝原水爆反対〟と大きな声で叫ぶことより、今誰もが〝人類の良心〟〝人間の精神〟について真剣に考えることが大事なのではないだろうか。

アジア諸国は今まで消極的な態度が多かつた。然し今や道徳的無関心、沈滞状態は世界の共通である。ある恐ろしい原水爆があるといういまの現状に甘んじようというのは、この上ない危険な態度であるといわねばならない。印度の云う〝平和〟は決して口先だけのスローガンや決議案でも公式でもない。

それだけが世界を破滅から救うという堅い信念から出た言葉なのだ。今や世界は一つの世界に近づきつつある。〝共存以外〟の道は完全な破滅しかないと私は思う。新しい世界を作つて行くのはこの精神であると信ずる。

この見地から私は日本国民に友情と愛情の手をさしのべるのであります。